

要 旨

国立公文書館（以下、館）本館の閲覧室において、利用者の利便性を現状よりも高めることが、本論文のねらいである。

閲覧室に求められる役割や機能について考えるために、第1章ではまず、利用者や来館者アンケートをもとに、どのような利用者がどのような目的で来館するのかを分析した。現在の閲覧室では、学術研究のために特定の資料を閲覧する目的での利用者が最も多いとみられる一方、歴史等への興味から閲覧室を訪れたという利用者も一定の率で存在する。館のこれからの在り方の検討においても、研究者だけでなく一般利用者層を意識したサービスの充実が求められており、特定の資料を利用したい者と、歴史等へ広く興味を持つ者との双方に対し、利用を援助していく必要がある。

閲覧室での利用を援助するためには、資料を検索するためのツールや、利用の方法についての説明が必要となる。現在でも、閲覧室ではそうした利用の案内は提供しているが、利用者にとってあまり理解しやすいものとはなっていない。利用者の利便性を高めるために、どのように改善していけばよいか。その点を考えるために、第2章ではアーカイブズ学の基本的なテキストブックである Keeping Archives（第3版 以下 KA）で、アーカイブズにおける Finding aids（検索手段）の考え方を整理し、閲覧室の現状との比較を行った。KAでは、検索手段を、目的や内容によって7種類に分類し、アーカイブズの一般的なガイド、検索手段のガイド、目録、管理記録、補助的な検索手段等の基本的な考え方を述べている。この記述と現在の閲覧室と照らし合わせると、とくに検索手段のガイドが、現在閲覧室に最も必要であると考えられる。検索手段のガイドは、施設とその検索手段を紹介するものであり、初めて利用する者が最初に参照すると想定される。第1章で見た、特定の資料を利用したい者と歴史等へ広く興味を持つ者のどちらもが初めて来館した際でも理解しやすいよう、館の説明、その利用方法の案内、そして他の検索手段の情報を提供することができれば、閲覧室における利便性の向上につながると考える。

第3章では、二つの利用者層を意識した上で、KAが示す検索手段のガイドの指針に基づき、新たな閲覧室での検索手段のガイドを作成した。これによって、館の紹介も含めて閲覧室の利用についてひととおり理解できるものになることも目指した。最後に、これまでの分析の中で見えた、今後の課題についても検討した。